

それは見たことのない調和のカタチだった。テリー・エリス氏のロンドンの自宅兼オフィスのドアを開けると、まるで異空間誘われたような気持ちになった。白い壁と高い天井からなる実にイギリス的間取りの中に、穏やかな表情の日本のクラフトが居場所を見つけ、心地よく佇む。

90年代からビームス・フェニカのバイヤーとして日本のクラフトに携わっているエリス氏。柳宗理との出会いからすべては始まった。「柳氏はクラフトとデザインを融合させた人物。彼との出会いによって、日本のクラフトが現在の日常生活に必ずフィットすると思っただんだ」

クラフトを求めて日本中を歩き、まずは自宅で使用してサイズのパランス、色味などを確認してからビームス・フェニカの店頭に並ぶ。しかしバイヤーとしてだけでは足りない、エリス氏のクラフトへの愛と想いは話を聞いているだけでひしひしとして伝わってくる。

「日本のクラフトの魅力は、美しくて便利という難しい2点が備わっていること。もちろんイギリスにも欧米にも手作りの工芸品は存在するけれど、華美すぎたり、値段が高すぎたりして「日常」として使えるものは少ない。手作りのクラフトは日常で長く使うことで新しい自分だけの美しさを発見できるのです」

そう語りながら愛おしそうに手のひらに収まった湯のみに目を落とす。「日本のクラフトのもう1つの大きな特徴は、製作者がたくさんいて大量生産されていること。その土地で買える値段で流通している。これは日本が誇りにすべきことだよ」

取材中、「クラフトは手に届く値段であることが大事」と繰り返し述べていたエリス氏。たとえば陶器。製作者が年を重ね、窯の名があがれば当然値段は高くなる。しかし師匠の作品が高価でも同じ手法を学ぶ弟子の作品はそれほど高くはなく、伝統は継承される。個人ではなく「窯」というファミリーで製作することにより、たくさんの方が流通する。そのヘルシーな循環が日本のクラフトを支えているという。

「日本の若者は今、日本のクラフトに注目しているよね。僕が若かった頃は背伸びしても高価なものを欲しがる若者が多かった。でも今は身の丈にあった予算内で、自分スタイルにあった良いものを探そうという傾向になっている。野心的ではないけれど、便利で美しいものに目の向けることができる人たちが増えているね。この風潮はきつとクラフトを支える力になるはず」

アート、デザイン、そしてクラフト。この3つにはこれまでヒエラルキーが存在していた。若い世代がその壁を壊し、もっと自由にクラフトを発展させてゆくかもしれない。そんな日をエリス氏は夢見ている。



日常に馴染ませることで新たな美しさを発見。



1. クラフトが実用と装飾両方に使われているリビングルーム。2. リビングルームの一角。本棚の間にもアクセント的にクラフトが置かれている。
3. 打ち合わせルームの一角。淡い色のクラフトとビビットなテキスタイルを大胆に合わせている。
4. 書斎に置かれた柳宗理のキャビネット。

カリスマバイヤー、テリー・エリスが選ぶ、 美しき日本のクラフト。

伝統工芸や陶器や木工といった手作りの品。日本はクラフト大国でもある。そんな日本のクラフトをカリスマバイヤーであるテリー・エリス氏がセレクト。ロンドンの自邸でも使われている、エリス氏が尊敬するクラフトとは？

Photos: Shu Tomioka(P.74-75), Shin Suzuki(P.76-78)
Text: Hanako Miyata(P.74-7), Wakako Miyake(P.76-78)
Direction: Wakako Miyake



TERRY ELLIS
テリー・エリス

株式会社キャップ代表
パートナーの北村恵子氏と共にビームスのレーベル「フェニカ」のバイヤーとして活躍。柳宗理より直々に薫陶を受け、民芸に目を向けるようになる。全国津々浦々を知る日本クラフトの第一人者。

日本のクラフトは価格が手頃。

ジャパクラフトを選ぶ三カ条。

- 1 The right size
日常サイズにフィットする大きさであること。
- 2 Functionality
明確な機能性があること。 everybody
- 3 Affordable for almost
誰にとっても購入できる価格であること。

OKINAWA

厨子ガメ(沖縄)

琉球の歴史が感じられるかつての骨壺。

王宮や寺院を模したような装飾が施された沖縄の厨子ガメは「死後の住居」でもある。厨子ガメ作りの第一人者、上江洲茂生さんの作品。「かつては骨壺として使われていた。古代のスピリットやロマンを感じるこの作品」。



OITA

小鹿田焼の壺(大分)

独特の文様が特徴的。リーチも認めた民芸品。

大分県日田市、血山を中心とした小鹿田(おんた)地区で焼かれている陶器。パーバード・リーチもこの地に滞在し、作陶を行った。「家族で継承されている窯で作られ、素材などの制限がありつつも大量生産されている、典型的な民芸作品」。



TOKYO

柚木沙弥郎のテキスタイル(東京)

モダンな型染めが部屋を華やかに。

故岸沢銚介氏に師事した型染めのテキスタイル作家、柚木氏の作品。「1922年生まれの柚木氏の、フレッシュで若さの溢れる作風に敬意を感じている」。柚木氏のプロダクトは「クラフトスペース わ」(☎03-3797-3567)でも購入可能。



IWATE

クシミ皮のバスケット(岩手)

使うほどに馴染む、しなやかな手編み。

アケビやブドウ蔓などバスケットの素材は種々だが、クシミもまた人気上昇中の素材。レザーのようにも見える深い色合いが特徴で、使うほどに手に馴染み、経年変化も楽しめる。「心地よい手触り、そして北国産の『強い心』を感じる作品」。

